

ミステリ読書案内

2024. 4. 4 発行元

第564号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

年が明けてからの新刊本は順調に出ている気がする。ランキング・ベスト10入りくらいの特別目を引く作品があるのかどうかはまだわからないが、シリーズものは出版予告期日を守っている並んでいる。

能登半島地震のその後

私は今、花崗岩の岩盤と北上古生層がある日本列島中では比較的頑丈な地盤の上で暮らしている。東日本大震災の時も建物被害はそう多くはなかった。やはり、自分が住んでいるところの地下がどうなっているか知っていた方がよい。

日本には火山関連の砕屑物、火山灰が堆積している場所も多いし、江戸時代ぐらいまでは海だったところを埋め立てたところも多い。宅地にする時に削って作った土地なの

か、盛り土をして作った土地なのかも大いに関係してくる。

大阪万博の会場となる場所だったり、沖縄のアメリカ軍基地の移転する場所だったり、原子力発電所の立地場所そのものだったり、更には核廃棄物の最終処分場所…と地盤、地下に関わる話題が連続して出てきている。簡単に「大丈夫だ」などと言わずに、地震対応も含めて地下構造の今以上の調査・吟味が必要に思う。科学者の何人かが警鐘を鳴らしても、政治の世界では無視されてしまうことも多い気がするが…。

鳴神響一「脳科学捜査官・真田夏希インテンス・ウルトラマリン」

1月に角川文庫から出た本。シリーズ19冊目。毎回違う色の表題がついているのだが、内容と合っているのかよくわからない時もある。今回はクルーズ船での航海の途中で起きる事件なので「ウルトラマリン」はピッタリなのかもしれない。真田夏希は休暇を取って小堀沙羅刑事と一緒に横浜から神戸までのショートクルーズに出發。ところが客船ラ・ブランセス号には強盗事件の犯人と傷害事件の犯人が逃げ込んだという知らせが…。昼食時にそれらの犯人たちが人質をとって乗っ取りに動き出した。部屋に閉じ込められ、本部とも連絡も取れず…。緊張感にまつまれた事件の渦中の夏希は…。

富樫倫太郎「SROneo | 新世界」

1月に中公文庫から出た本。『SROシリーズ』は前作までで10冊出ている。11巻目に当たる本書は『neo』となって新しいスタートになる。SROは警視庁広域捜査専任特別調査室のこと。山根新九郎は刑事部長に転出し、新しい室長には芝原麗子が昇格。メンバーにも変更が…。

川久保が前作で射殺され、沙織は宗教団体の信者になり、人員不足。そこを補うために異動してきたのは厄介者の…。シリアルキラーの近藤房子も亡くなり、殺し屋の方も入れ替わる。そして相変わらず全員が面倒事を引きずって苦しい日々。そんなところへ血を抜かれて死亡したとみられる死体が連続している事が明らかになり、死体を遺棄した場所の関連から殺人者を絞っていくことに…。まぐれ当たりの推理が的中して…。

加藤鉄児「実家暮らしのホームズ」

1月に宝島社文庫から出た本。この作者の本を読むのは初めてだ。オリバー・オコンネル財団が主催する「眠る探偵プロジェクト」で最高得点を取ったのは引きこもりの青年・判治リヒト。財団の日本支部のホルツマンが自宅を訪ねて事件の解決を依頼するという形式。まったく自宅を出ないわけではなく、パトカーに乗るのは好きなようだ。基本的には安楽椅子探偵のタイプ。そして、事件は「暗号」絡みが多い。今時代風に「8ビットの遺言」があったりもするが…。冷凍庫を使った密室の構成にも新しい発想を見せている。話の流れがもう少しスムーズだと読みやすいのだが…。今後に期待。

太田忠司「名探偵犬コースケ1 消えた女神像」

昨年12月に朝日新聞出版から出た本。児童書。『ナゾノベル』と名付けられたシリーズの中の一冊。この『名探偵犬コースケ』も今後シリーズものになるようだ。次作は一年後との予告で、ちょっと先は長いが…。

舞台は伏城市。中学校一年生の桜山凱斗が主人公。母親の紫緒が探偵事務所の所長。元々は父親の耕助が所長だったが三年前に病気で亡くなったので母親が後を引き継いだ形。飼犬が二匹。一匹が母犬のクララ。子犬の方がコースケ。ミニチュアダックスフント。第一話の『消えた女神像』は資産家の今永和則から美術品の水晶彫刻の女神像を守ってほしいとの依頼。「怪盗スカル」から「7月20日の午後9時に女神像をちょうだいする」との予告状が届いたのだという。なぜか犬のコースケと一緒にいきたいと言っているようなそぶりなので連れていくことに…。約束の刻限に部屋の前を警備していると…。凱斗の耳にはコースケから謎解きのヒントが囁かれているような声が響いてくるのだ…。